

通釈『八重葎物語』（その一）

【キーワード】八重葎、中世王朝物語

妹尾好信

はじめに

中世王朝物語『八重葎』の通釈を試みた。同物語には、今井源衛氏『やへむぐら』（古典文庫 昭和36年）と、田村俊介氏「『八重葎』注釈」（上）（中）（下）『富山大学人文学部紀要』第49・50・51号（平成20年8月・21年2月・21年8月）の新旧二種の注釈があるが、いずれにも全訳が付されていないためである。底本には、新出の原豊二氏蔵『八重葎物語』を用い、濁点・句読点・かぎ括弧等を付した他は原文通りに翻刻して本文とした。同本は静嘉堂文庫蔵本と同系統なので、静嘉堂本との異同を行間に注記した。また、本文の不審箇所についても行間に注記した。便宜上、『鎌倉時代物語集成』第五卷所収の翻刻本文の形式段落にしたがって段落分けし、各段落に通し番号と短い見出しを付した。引歌・引詩についてのみ、訳文に*を付して注を付けた。訳文は原文を尊重したが、主語を補うなど注釈なしで通読できるように配慮した。今回は第20段落までを扱う。

【1】何ごにもすぐれた貴公子、中納言の紹介

人の語りしは、昔と、中納言のきみと聞えて、かたち心ばへをか
しかりしは、其頃の中宮の御せうと、故^左大臣殿の御つぎのひとつ
子になむおはしける。母上は故かうづけの宮のうへの御妹也。此宮
のたゞひとりもたまへりける姫君なむ、内の御はらからの中つかさ
のみやのうへにて、御あはひもいとうるはしくおはしましけり。お
とこかくれさせ給へど、中納言殿おとなび給ふめれば、こゝろもと
なき事もあるまじげなるに、まして、おほやげさまのみち／＼しき
ざえなどは、ことのものにもまさせ給ひて、又はかなきこと・笛の音も、
其心をと、のへしり、すべてあかぬ事なき人さまにいまそがりける。

〔通釈〕

人が語ったところでは、昔々、中納言の君と申し上げて、容貌・
人柄ともにすぐれていた方は、その頃の中宮の兄君で、亡き左大臣
殿の跡継ぎの一人息子でいらっしやう。母上は、亡き上野の宮妃
の妹君である。この宮がただ一人お持ちであった姫宮が帝のご兄弟

の中務の宮の奥方で、中納言との御仲もとてもうるわしくいらっしやう。父左大臣はお亡くなりになつたけれども、中納言殿が立派に成長されているようなので心配は無用に見える上に、まして中納言殿は、公的な学問向きの才能などは亡き殿よりも優れていらして、また琴や笛を奏でさせると音楽の心をわきまえており、あらゆる点で不足なところのない人物でいらつしやるのであつた。

【2】右大臣の中の君との縁談を拒み独身を続ける中納言

廿三四にもやおはしけむ。中つかさの宮もおなじ御よはひならんかし。さる御なからひといふうちにも、とりわきおほしかはして、はかなき事のすぢをも、かくさむものとはかたみにおほしたらざるべし。「あやしう、今までひとり住にてものしたまふこそ玉のきずみよるもひるもなげかせ給ひて、御みづからも、人づてにも、たえずきこえ給へり。さるは、さりぬべき御あはひのなきにもあらず。「右のおとゞの中の君にあはせ奉り給ひて、御うしろみをもものせさせ給ふべく」と、ことの、ゆい言に、あなたさまにも内こにもなたまはせおきてしかば、やがてその程にもわたり給ふべくありしかど、いみじう物うがり給ひて、あながちにかけてはなれ給ふもいとほしくて、かくはあるなりけり。

〔通釈〕

中納言は二十三、四歳でいらしたろうか。中務の宮も同年齢のは

ずである。ご親族の間柄とは言つてもお二人はとりわけ肝胆相照らす仲で、ほんの些事でも隠し立てしようとは思ひでないようなのである。「奇妙なことに、中納言が今まで独身でいらつしやるのは玉の疵というものだ」と、世間でも言い、まして中納言の母上はただそのことばかりを昼夜を問わずお嘆きあそばされて、ご自身でも、また人伝へにも、いつも申し上げなされてきた。というのも、しかるべき縁談がないわけでもないのである。「右大臣の中の君を娶らせ申し上げなされて、右大臣に後見をしていただけるところに」と、亡き大臣が遺言として、右大臣家へ内々にも申し入れておかれたので、すぐその時にでも婿入りなされてよいところであつたが、中納言がひどく気がすすまぬ様子で、ことさらに遠ざけなされるもお気の毒で、こんな状況にあるのだつた。

【3】中納言の道心と厭世観

人しれずおほすこと有て、「それならでは」などおほすにもあらず。たゞいかなるにか、世をはかなき物におもひとり給ひて、「いかで此世を捨てしがな。佛の御あとをまねぶまでこそおほけなからめ、せめて身ひとつのくるしみをだにのがれて、この五のにこりふかき世にまたも生れござらなむ。かつはいけるかぎりも人の末のおくる、はくち惜きわざ也。そうとく太子だに、ぞうたえむ事をねがひ給ふめるに、なにのいたはりなきみの、よの常にてあかしくらす、いと心うき事」と、年月にそへて思ひなり給へど、「たゞひと、こ

ろ物し給ふ上の、かつ見るだにあかずおぼしたるを、たれにみゆずり聞えてか、さる道にもおもひたゝむ。さらばさはとて、行はなれなば、限りある御命もかならずたえ給ひなまし。くるしみをのがれむとて、いつゝのさかさまの罪におちなば、佛もよき事とや見給ふべき。いとゞおもふ道には入がたからむ。たゞおはしますかぎりは、朝夕に見え奉りてむこそめやすからめ。是だにあるを、女とてすゑおかば、心ゆかずながらも、とし月にならば、えさらぬほだし共こ、らいでこむ。いつの時に（にか静）、かしこき道にぞたどりいらむ。あなむつかしや」とおほす心のみ、おとなび給ふまゝにふかく成行給へば、すこしも人としきあたりには、なげのなさけさへいひ出べき物とは思ひ給はず。

〔通釈〕

中納言には人知れず意中の人があって、「その人でなくては」などとお思いなのでもない。ただどういうわけか、世をはかないものと悟りなざつて、「何とかしてこの世を捨ててしまいたいものだ。仏のご事跡を做うとまで言う」と恐れ多いが、せめてこの身一つの苦しみだけでも逃れて、この五濁（ごじよく）の濁り深い世に再び生まれてこないようにしたい。一方、生きている間も、人の子孫が劣っていくのは残念なことだ。聖徳太子でさえ一族が絶えることを願ひなざつたようなのに、何のとりえもない身で世間並みに日々を明かし暮らすのは、実に情けない」と、年月を追って思うようになられたが、「ただお一人いらつしやる母上が、目の前に見えてさえ満足できず

思つていらつしやるのを、いったい誰にお譲り申して、出家の道に思い立とうか。それならばままよと母を見捨てて出離に及んだら、限りのあるご寿命も必ず絶えておしまいになるだろう。苦しみを逃れようとして、母を死なせるといふ五逆の罪に堕ちてしまったら、仏もそれをよいことだとはご覧になるはずがない。ますます思い描く仏の道には入り難かるう。ただ、母上が生きていらつしやる限りは、朝夕に顔をお見せするのが安心なことだろう。これだけでも重荷なのに、妻として女を据えておいたりしたら、気のりがしないながらも、何年も経てば、離れることのできない絆（はだ）となる子がたくさん生まれてくるだろう。そんなことになると、いったいいつになったら、尊い仏の道にたどり入ることができよう。ああ、やつかいなことだ」とお思いになる気持ちだけが、長じて大人になるにつれて深まっていくので、少しでもまともな身分の女性のあたりには、かりその情けすらも口に出すべきものとお思いでない。

〔4〕世間で色好みと噂される中納言

宮づかへ人のはかなきなどには、おもはずなるたはぶれ事も、こゝにふれてはいひかはし給へば、下の心のづしやかなるはする人もなければ、よの中には、「あだに物し給ふ御色（ごの）のみの、すきありきのかたからんをおぼしはかりて、かうあぢきなきひとり住せさせ給ふ」などいふめり。まことのひじりさへ、女のすぢには道をもうしなふなれば、まして、かくて一日もさぶらひ給はむほどには、

あはれと見給ふ御しのび處も、おのづからはなどかなからむ。

〔通釈〕

どうということのない宮仕え女房などには、思いの外の戯れ言も、折にふれては言い交わしなざるので、中納言の内心の落ち着いた重々しさなどは知る人もなくて、世間では、「浮気者でいらつしやる色好みの御仁が、結婚すると女漁りをし歩くのが難しかろうと敬遠なさって、こんな味気ない独身暮らしをしていらつしやるのさ」などと言うようだ。久米の仙人のような本当の聖人ですら、女の方面では神通力を失うそうだから、まして中納言は、こうして一日でも女人の多い宮廷にお仕えなさる間には、しみじみ心惹かれてご覧になる秘密の恋人もおのずからいはずはないのであった。

〔5〕中納言、中務の宮とともに小倉山の紅葉狩りを計画

長月廿日の程に、れいの中つかさの宮へおはしましたければ、宮はつばせんざいのもみちいとをかしき夕ばえを見させ給ふほどなりけり。御せうそこ聞え給へば、「こなたに」とて、御しとねひきつくろひて御対面あり。かたみにをかしき御さま・かたちを、御まへの人もめでたくぞ見む。「秋ものこりなうこそ成行めれ。をぐらのもみち、いかにそめまさむ。此頃のほどにおもひたち給ね。とう中將・右衛門のかみなども物せんとこそいひしか」と聞えさせ給ふ。「しか、よく侍らむ。されど、をぐらといはん山のもみちははかぐしき色にも侍らざらむ。木だちなど、なつかしうきはことなるは、此御覧

ぜらるゝにます事はさぶらふまじくや」とめで給へば、「なにはさはらぬとこそいひためれ」などのたまひて、さるべき御くだ物どもまるりて、くれぬれば帰り給ふとて、「山へはあす物せさせ給ひなむや。ずいじんにてを侍らむ」とのたまへば、「つとめてよりさそひたまへ。されど、いとことぐしきずいじんはむつかしからむ」とほゝゑみ聞え給ふ。

〔通釈〕

九月二十日の頃に、中納言が例によつて中務の宮へお出かけになると、宮は壺前栽の紅葉の実に見事な美しい夕映えをご覧になっているところであった。ご案内を請われると、宮は「どうぞこちらへ」と、座布団を整えてご対面になる。互いに美しいご容貌を、御前に控える女房たちもすばらしいと思つて見ていることであろう。宮は、「秋も残り少なくなつていくようだね。小倉山の紅葉もどんなにか色濃くなつているだろう。近日中にお出かけしようよ。頭の中將や右衛門督なども行きたいと言つていたよ」とお勧めになる。「それはよいですね。でも、『お暗い』を連想する名の山の紅葉なんて、たいした色ではないでしょう。木立などの、身近であつて格別なのは、このご覧になつている紅葉にまさることはないのじゃないでしょうか」と中納言が庭の紅葉をお褒めになると、「でも小倉山の紅葉は『名には障らぬ』と言うようだからね」などとおつしやつて、折にあつたお菓子などをお召しになる。日が暮れたのでお帰りになる時、中納言が、「小倉山へは、明日お出かけになりますか。隨身

としてお供いたしましたよう」とおっしゃると、宮は、「早朝から行くよ。誘っておくれ。でも、いやだな。大げさな随身はわずらわしかろうし」とほえんでお答えになる。

*「もみち葉をけふは猶見むくれぬともぐらの山の名にはさはらじ」(拾遺集・巻三・秋・一九五・能宣)を引く。

〔6〕中納言、乳母子あきのぶに中務の宮接待の準備を指示

きみはかへり給て、御めのとの子のあきのぶをめして、「明日の御まうけ、をかきさまに、大井のわたりに待きこえよ。あるじにはさゑ門のかみをこそたのみ聞えぬ。」さて、あるべき事どもものたまひつけて、またの日のつとめて、宮へ参りたまふ。御車どもひきつけてきほひおはす。御ともの人も、若きかざりはおくれじとしりの、しれど、「さるは、いとさわがしう」とて、さるべきばかりこれかれ、さぶらはせ給ふ。

〔通釈〕

中納言の君はお帰りになって、御乳母子のあきのぶを呼んで、「明日の御もてなしの用意を、うまい具合にしつらえて、大堰のあたりでお待ちしておれ。接待の主人には左衛門督をお願いしようと思う」と言う。そして、しかるべき事柄をあれこれ言いつけなさって、翌日の早朝に、中務の宮へ参上なさる。お供の人も、若い連中は皆おくれまいと駆けつけて騒ぐのだが、「それじゃ騒がし過ぎる」と言うので、しかるべき者だけ、誰彼をお供させなさる。

〔7〕一行、小倉山の紅葉を堪能

やまにおはしましたつきて見給へば、おほしやりけるもしるく染増ける紅葉のいろくは、にしきくろうみゆ。しづ枝を折て、中将の君、青海波をけしきばかりまひたる、いとおもしろし。「ひかる源氏と聞えしいにしへのかざしもかばかりにこそ」と皆めでさせ給ふ。「いとまばゆき御よそへになむ。其たちならびたりけむみやま木のかげだに待らじを」とわらひ給ふ。

時雨さとして、露ほろくともみだる、程、いとどえむなり。かむの君、

たづねこし君がためとやくれなあのいろを染ます時雨なるらむときこえ給へば、宮、

ちらぬ間はこゝにちとせもをぐら山見で過がたきみねのみぢと
葉

とけうぜさせ給ふ。

「なのみして山はをぐらもなかりけりなべてくさ木のみぢしつ

れば

思ふ給ひしにはこよなうかはりたる山のけしきにこそ」と聞え給ふ。とうの君、

ふる里はいづくなるらむをぐら山紅葉のにしき立かさねけり

さが野もはるくくと見わたされて、きりの絶間のをみなへしなどは、繪にかきたらむにもおとるまじき。「花のさかりを秋風の吹」など、「誰にかたらむ」とをかし。

〔通釈〕

小倉山にご到着になつてご覧になると、思いやつておられた通り、さまざまな色に染めまされた紅葉は、明るいはずの錦の色も暗く見えるほどである。下の方の枝を折つてかざしに挿し、頭の中将の君が青海波をほんの少し舞つたのは、まことに見ものである。「光源氏と申した方の昔のかざし姿も、これくらい見事だつたことでしょう」と、誰もみな賞讃なざる。中將は、「何とも面映ゆいお諭えです。その光源氏に立ち並んだとか言う深山木（頭の中將）ほどの見栄えもありませんのに」とお笑いになる。

時雨がさつと降りかかつて、木々の梢から露がぼろぼろと乱れ落ちる時の風情は、ますます優艶である。右衛門督の君が、

たづねこし…（訪ねて来られた中務の宮様のためにと思つて、紅のまみじの色をいっそう濃く染める時雨なのでしょう。）

と申し上げなされると、中務の宮は、

ちらぬ間は…（散らない間は、ここで千歳の年月も送りたいものです。小倉山の、見ないで通り過ぎ難い峰のみみじ葉よ。）

と興じなされる。

なのみして…（名前だけのことで、実際山はお暗くありませんね。あらゆる草木が紅葉していますから。）

存じておりましたのとは全然違う、山の景色だことよ」と、中納言が申される。頭の中將の君は、こう詠んだ。

ふる里は…（故郷に錦を飾る」と故事にあります、いったい小倉山

の故郷はどこなのでしょう。紅葉の錦をこんなに裁ち重ねて着るなんて。嗟、野もはるばると見渡されて、霧の絶え間の女郎花などは、絵に描かれたものにも劣りそうにない花の盛りなのを、「秋風の吹く」などと「誰に語らむ」と興趣をそそられる。

* ** をみなへし花のさかりにあき風のふくゆふぐれを誰にかたらん（後撰集・巻七・秋下・三四一・よみ人しらず）を引く。

〔8〕大堰における中務の宮接待の趣向

こなたかなた行おはすに、大井のわたりよりすこしひきのけて、ぜじやうひきまはし、萩のえだなど引むすびて、空だきもいとえんにかをりて、さすがに人しげくは見えず。「いかなるもの、秋を、しむならむ。此御けはひに、しのび給ふとも、さりともき、たらむに、びんなき様かな。かむだちめ・上人などにはよもさぶらふまじ。たゞ、あやしのしれもの、おのがとく有ま、にかくはふるまうに侍らむ。中とさやうのものは、かり奉るべき事とも思ひたらじ」など、中納言の君きこえ給ふに、さゝもむの君、きちかうのなほし、二あひのさしぬき、ゆゑづきをかしきさまして立出給ひて、「なきさきよくは」と御けしき給はり給ふ。さるは、さまかへたる岸のわたり成けり。宮をはじめ奉りて有かぎりわらひ給ひて、「しれものは是な」とて、袖をひきしろふ。中納言のつきぐしくいひためる事かたらせ給へば、此君もいみじくわらひ給ふ。「けふの御まうけのため、中納言の君の、たまひつたりしかば、いかでをかしから

む事をとおもふ給へしかど、をれもの、心のおきてはひがくしくなん」とかしこまりきこえ給ふ。

〔通釈〕

あちらこちら逍遙なさっていると、大堰のあたりから少し引つ込んだ所に、軟障を引き廻らして、萩の枝などを引き結んで、空薫きの香も実に優艶に薫っていて、さすがに人の姿も多く見えないところがある。「どこういう者がこんなところで秋の名残を惜しんでいるのだらう。宮様が来ておられるという気配は、いくらお忍びでいらしても、そうとも聞いているだらうに、不都合なことだ。上達部や殿上人ではまさかありますまい。ただ、賤しい愚か者が、自分に財産があるにまかせてこのように振る舞っているのをございましたよ。なまじそのような手合いは、ご遠慮するべきこととも思っていないのでしよう」などと中納言の君が申されているところに、左衛門督が、桔梗の直衣、二藍の指貫という、由緒ありげで風流ないでたちで出て来られて、「渚清くは…」とご挨拶なさる。そう言うだけあって、実に風変わりにつつた川岸あたりの風情である。中務の宮をはじめとして、皆が皆お笑いになり、「愚か者とは、こいつのことだな」と言って、袖を引っ張り合う。中納言がこの場に似つかわしい論評をなさったようなことを宮がお話しになると、この君（左衛門督）も大笑いなさる。「本日のご接待のため、中納言の君が私にお命じなさいましたので、何とか風流な趣向をお目にかけていたと存じましたが、愚か者の考えることはひねくれておりまして…」とか

しまつて申し上げる。

*「さざらなみまもなくしをあらふりなきさきよくは君とまれとか」（大和物語・第一七二段・黒主）を引く。

〔9〕一行、大堰の風情を堪能する

はかなう、よのつねならずしないたまふれば、をかしがり給ひて、紅葉をたかして大みきまゐる。御ともにさぶらふはかせめしいで、昔のみどりをはらふ人も有けり。ことひきならし、笛ふきあはせて、「伊勢の海」などうたふ。鹿もおとらじと思ひがほに、あはれになきそへたるほど、いはんかたなくおもしろし。御さかづき給はすとて、

詠むればまた惜まれて秋ぎりのたちわかるべきこゝちこそせねとめでさせ給ふ御さまめでたく、宮と聞えさせんにことあひぬべし。

『「ちらぬ間は』と聞えさせ給ひし山のためうしろめたう』とたはぶれつ、御かはらけとり給うて、中なごんの君、

いづくとかわきてさだめむよの中のいろかにうつる人のこゝろは

あまた、びめぐりて、有明の月たかくのぼるほどに、御くるまに奉る。わかき人と、帰さの道に行かくるべき心まうけにや、わかれくにかへるも、たゞなるよりはをかし。中納言殿ばかりぞ、宮までさぶらひたまひてまかで給ふ。

〔通釈〕

かりそめに、世間並みではなくしつらえてあるようなので、宮は面白がりなさって、紅葉を焚かせてお酒をお飲みになる。お供に祇候している博士を召し出して、苔の緑を払う（漢詩を作る）人もあった。琴を弾き鳴らし、笛を吹き合わせて、催馬楽「伊勢の海」などを歌う。小倉山の鹿も劣るまいと思ひ顔に、しみじみと心にしみいる声で鳴き添えたときの風情は、まことに言いようもなく面白い。中務の宮は中納言に酒杯をくださるといので、

詠むれば：（この大堰の美しい景色を眺めていると、また名残が惜しまれて、秋霧が立つ中、立ち別れて帰る気がしないことだ。）

と詠んで、この場の風情を賞翫なさるご様子はすばらしく、宮様と申し上げるのにまことにふさわしい方である。「そんな浮気心では、さつき『散らぬ間はここに千歳も…』とお詠みになった山（小倉山）のために、うしろ暗くはありませんか」と冗談を言いながら、杯を取って、中納言の君はこう詠んだ。

いづくとか：（どこがよいと区別して定められましようか。世の中の表面的な色香に迷ってあちこち目移りする人の心は。）

酒杯が何度も何度も廻って、有明の月が高く上る頃に、宮は御車にお乗りになって帰途につかれた。若い人々は帰り道になじみの女性のところへ身を隠そうとの算段であるうか、互いに距離を置きつつ帰るのも、普通に車を連ねるのよりも風情がある。中納言だけが宮邸までしたがいなさってからお帰りになる。

・・*「林間に酒を煖めて紅葉を焼く 石上に詩を題して緑苔を掃ふ」（和漢朗詠集・卷上・秋興・二二一・白居易）による。

【10】中納言、琴の音に惹かれて四条の茅屋に入る

四条のほどおはすに、いといたうあれたれど、うとましきほどにはあらぬに、ことのねたえくきこゆ。何ばかりふかきてづかひにはあらねど、なさけくはゝるつまおとはめづらしうえんなる心ちし給ひて、あきのぶを御ともにて、ついぢのくづれの有よりいりてみ給へば、よもぎ所得て、みつのみちもわきがたきほどなり。南に向たるひむがしのかたに、火のかけかすかに見えて、人のけはひす。やをらより給ふに、きしくとなるすのこのおともうるさけれど、き、つくる人しもなきぞ心やすかりける。されど、しりけるやうに、ことはひきさしつ。

〔通釈〕

四条通りをいらつしゃっていると、とてもひどく荒れているけれど、疎ましいほどではない家から、琴の音が絶え絶えに聞こえてくる。どれほどの熟練した手さばきではないが、情趣が感じられる爪音は、珍しく優艶な気がして、中納言はあきのぶをお供にして、築地の崩れのあるところから中に入つてご覧になると、蓬がわが物顔に繁つて、井戸・門・厠に通じる三つの径も見分けられないほどである。南に向いた建物の東の方に火影がかすかに見えて、人の気配がする。そっと近づいていかれると、ぎしぎしと鳴る簀子の音もう

るさいけれど、それを聞きつける人もないので安心である。しかし、まるで中納言が近づいたのを知ったかのように、琴の音は止まった。

〔11〕中納言、美しい姫君を垣間見る

からうじてかうしのひまよりかいまみ給へば、すだれ高く巻て、うき雲もなくてしづかに行月のをかしきを、はしちかくて見る人のかほ、いひしらずらうたげに、かたのほどにかゝれるかみのこちたうひかへられける末もうちきの裾にかぎりも見えずたまりてをかしきに、しをんいろの御ぞになでしこなどのなれたるをなつかしうきなして、「かたもむ・うきもむなどのくれ。なるよりもなまめかしうみゆるは、人がらなめり」と見給ふに、おくのかたにひとりふたりがけはひして、「なほ、今ひとかへり」とぞそ、のかし聞ゆれど、いらへもせず。月にながめ入りて、「見しよの秋に」といひけつは、つらき人のなごりなどを思ふにや。「かゝる道はいとはるかに、あはれをしるべきものとも思ひたらぬわれしも、かばかりにて立帰るべき心ちもせねば、ましてよのつねならむ人のあはれをもかけざらむはなごかなからむあな。今のほどにもしのびくる人あらばみつけれれむもをこがましう」と思ひつゞけれ給へど、「よしや、行とまるこそやどならめ。住はつべきよの中かは」とこゝにてさへいとはしきかたもよほされ給ふ。

「御車、あかつきに物せよ」とて、あきのぶをば帰し給ひて、なほ御らむずれば、おくのかたより人出て、「今はいらせ給ひね。夜

はいたうふけ侍り。『いむなる物に、さのみめで給ふ』とあなたに聞え給ふ」などいへば、やをらすべり入。

〔通釈〕

からうじて格子の透間から垣間見なざると、簾を高く巻き上げて、浮雲もなくて静かに空を渡っていく月が美しいのを縁の近くで見ている人の顔が見えて、言いようもなく可憐で、肩のあたりにかかっている髪が豊かで、大きく後ろに引つ張られるように伸びている先の方も、袴つらの裾に先端も見えずたまっている魅力的である。そして、紫苑色しおんの御衣おんぎに、瞿麦なでしこ襲などの着慣れた衣装を親しみ深い風情に着こなして、「固紋や浮紋などの模様なが、紅色よりも優美に見えるのは、この人の人柄なのだろう」とご覧になると、奥の方に侍女が一人二人いる気配がして、「やっぱりもう一回お弾きくださいよ」と弾琴をお勧めするのだが、その人は返事もしない。一心に月をながめふけて、「見し世の秋に……」と和歌を途中まで言いさして止めるのは、つめたい男の名残を思っているのだろうか。「このような色恋方面の道はまったく疎遠で、男女の情けをわきまえている者とは思っていない自分が、これだけのことでここを立つて帰ろうという気にもならないのだから、世間並みの関心の持ち主ならこの人に魅力を感じない者がどうしていようか。今すぐにも、忍んで来る人があれば、この人を見つけれられてしまうのもばかげている」と、つい思い続けてしまわれるのであったが、「ままよ。足あしの止まる所とがわが宿なのだろう。どうせいつまでも生きていられる世の中では

ないのだ」と、この人はこんな場でさえ、厭世的な気分が催されなさるのだった。

「御車を暁に迎えに寄せ」と言つてあきのぶを帰らせなさつて、なおご覧になつておると、奥の方から人が出て来て、「今はお入りなさいませ。夜はひどく更けました。『月の顔を見るのは忌むことと言いますのに、そんなに月をめではかりいらつしやる』と、あちらでは申し上げていますよ」などと言つと、その人はそつと滑るように奥に入った。

「さとかぬ雲の月のかげのみやみし夜の秋にかはらざるらん」（山路の露・三・浮舟）を引く。「世中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞやとさだむる」（古今集・卷十八九八七・よみ人しらず）を引く。

〔12〕中納言、女君の寝所に入る

君は、「いかゞはせむ、なほ思ひたつかたのかなはで、心にもあらぬよにながらふほどのなぐさめには、此人をやたのみてまし。ことごとくしきものにもあらねば、ひと夜ふたよにて見ざらむも、身づからひとりのいとほしきこそあらめ、こゝかしこの人間をはゞかるべき際にもあらず」などおほしなりて、ひし／＼とおろすにまぎれて、母屋のびやうぶのはさまにしのび入給ひて、うちしづまる程に、きぬを、しやりてより給へるに、まだよくもまどろまねば、さとおどろきて、おもはずなる御けは（御聲）はひをいみじとみるまゝに、あさましようあきれて、いとほしき様なり。かねて心をはしたらむにて

だに、まだよなれぬほどはおもひまどひぬべし。ましてわりなうわな、きゐたる、ことわりなり。

〔通釈〕

中納言の君は、「しかたがない。やはり、心に思っている出家の方面がかなわないで、不本意な俗世に生き長らえている間の慰めには、この人を心の頼りにしようか。どうせたいした身分の者ではないので、一夜か二夜で以後逢わないとしても、当人だけの気の毒さはあるが、あちこちの人間きをはばかる必要のある身分ではない」などと思つようになられて、格子をぎしぎしと下ろす物音に紛れて、母屋の屏風の隙間に忍び込みなかつたところ、内部が静まつた頃に、夜具を押しつけて女君に寄り添いなかつたところ、まだよくはまどろんでいながつたので、敏感に目を覚まして思いがけない男の気配を大変なことと見たとたん、あさましく呆然として、気の毒なさまである。かねてから心を通わしているような相手であつてさえ、まだ男女関係に慣れていないうちは思い感うに違いない。まして、この場合は見知らぬ男なので、女君がどうしようもなく震えているのもつともなことである。

〔13〕中納言、女君をかき口説く

「たゆたふ心のほどは、そこにこそしり給はめ。『其よながらのかげは見ざりき』とこそいらへまほしかりけれ。げに、かたち・匂ひこそそのよの人にはおとり侍らむ（め）、心ざしなどはいかでまくべき。

ふかきためしに、いま行末の人にもいはせむ。ゆめむくつけきものに思ひ給ふな」と、いとなつかしうやはらかにかたらひ給ふに、のどむとはなけれど、「きつね・こだまのへんげにや」とたちまちにきえまどひしおそろしさはすこしづまりぬれど、なに心もなううちとけたらむほどを見え奉りけむはづかしさは、しぬばかりわりなくて、あせもよ、と流れぬ。

〔通釈〕

「たゆたう私の心中はあなたがご存知でしょう。あなたが『見し世の秋』と口ずさまれたとき、『その世ながらの影は見ざりき』とご返事したかったですよ。なるほど、容貌や色つやはその夜にあなたが逢った人に私は劣っておりましょう。しかし、愛情などはどうして負けましょうか。愛情が深い先例として、将来の人にも言わせてみせましょう。決して気味が悪いものに思わないでください」と、とても親しみ深く柔和に語らわれるので、女君は心が落ち着くわけではないけれども、「狐や木霊の変化ではないか」とたちまちのうちに消え惑った恐ろしさは少し鎮まった。しかし、何も取り繕わず打ち解けているようなところをお見せしてしまつたらしい恥ずかしさは、死ぬほど堪え難くて、汗もたらだらと流れるのだつた。

* 「琴の音にひきとめらるる綱手縄たゆたふ心君しるらめや」(源氏物語・須磨・二〇六・五節)を引く。* 「ふる郷の月は涙にかきくれてそのよながらのかげはみざりき」(山路の露・四・蕙)を引く。

〔14〕 曉、あきのぶが中納言を迎えに来る

「よをなが月といふにやあらむ」といひしころなれど、ふけにかばや、ほどなく明がたちかうなりぬ。あきのお出きてしはぶけば、「思ひかけぬ事にもあるかな」とて、かうしはなちて、じゅうといふぞるで行。「かくまゐりたりときこえ給へ。いつならはせ給へる御たびねのいぎたなさならむ」といふ。「これにかきこえさせむ。かゝる御せうそこ聞えさすべき人もおはしませず。門たがへにや」といへば、うちわらひて、「そこにみちびき給はぬには、かくしもうちとけ給ふべき御有さまかは。あやしの御物あらがひかな」ときこゆるに、あやしうなりて、たち帰りまゐりくるを、き、つけ給ひて、「あきのぶは物しつや。よはまだふかゝらむものを」とて、おき出給ひて、御なほしなどひきつくるひて、よべ入給ひしかたのかうし、御手づから引あけて、もろともにいざよひ出給ふにぞ、おどろかれける。「年比の前わたりによく見奉りて、をかしき御有さまをみるたびに、『いかなる人、かゝる人におもはれ奉らむ。さらむはいみじきさいはひ人』とおもひわたりしに、さはわが御もとはたかきくせのおはしけるよ」と、いとうれしうおもひゐたり。「いつの程に入せ給ひつらん」と、是ばかりぞあやしかりける。

〔通釈〕

「夜を長月と言ふにやあるらむ」と古歌に言われた頃ではあるが、更けてしまつていたからか、ほどなく明け方近くになった。あきのぶが戻つて来て咳払いすると、「思いがけないことだわ」と言つて

格子を開けて、侍従という女房が応対に出て行く。「こうしてお迎えに参ったむねを申し上げてください。いったいお習いになった旅寝の朝寝坊なのだろう」とあきのぶが言う。侍従が、「どなたに申し上げましょう。かような消息をお伝えすべき人もここにはいらっしません。家をお間違えなのは」と言う、あきのぶは笑って、「そなたが手引をなさらねば、こんなにもうちとけることのおできになるご様子の方ではありませんぬ。妙なご抗弁ですな」と申すので、侍従は不審に思つて立ち戻り、女君のところへ参上して来た。その足音を中納言は聞きつけなさつて、「あきのぶはもう来たのか。夜はまだ深かるうものを」と言つて起き出されて、御直衣などを整えなさつて、昨夜お入りになった方向の格子をご自分の手で引き上げて、女君をご一緒に誘い出されたので、それを見た侍従はびっくり仰天したのであつた。侍従は、「数年来、家の前を通行なさるところをよく拝見して、美しいお姿を見るたびに、『いったいどんな人がこのような方に思われ申すのかしら。そういう人は大変な幸せ者だわ』と思ひ続けていたというのに。それでは、うちの主人は、すてきな宿世の持ち主でいらしたのね」と、うれしく思つて座っている。「それにしても、いつの間にお入りになったのかしら」と、そればかりが不思議なのであつた。

*「秋ふかみこひする人のあかしかね夜を長月といふにやあるらん」〔拾遺集・

卷九・雑下・五二三・躬恒）を引く。

〔15〕中納言と女君、明け方に和歌を贈答

明がたの月くまなくさし入に、女いとまはゆくてうちそむきあるかたはらめ、かんざしのかゝりは、^{〔15〕}も、やむごとなき人にもおとるまじく、あてにらうたく見ゆ。すりなどもせで久しう成ぬれば、いたうあれて、たゞいとしげき草のうへにすき間もなくおき渡したる露のみ、つらぬきとめし玉かとみえて、中とはな・紅葉よりもあはれにみゆ。

くる、間をたのめてもなほ朝露のおきわかる、はわびしかりけり

なき乱る、むしの聲とぞ、玉のうてなよりもこよなくまさりける。

女、

わびし^{〔15〕}ともおもほえぬかなよと、もにおきそふ袖の露にならひて

とつ、ましげにいふ。も、なつかしうなまめきて、近くて見給ふはいとゞらうたし。

〔通釈〕

明け方の月の光が曇りなくさし入るので、女はいつそう恥ずかしくてそむけている横顔や髪のかかり具合は、高貴な人にも決して劣りそうになく、上品で可憐に見える。修理などもしないで久しくなっている、ひどく荒れて、ただ繁りに繁った草の上に隙間もなくびつしりと置いた露だけが、貫き留めた玉かと見えて、かえつて花や紅葉よりもしみじみと感興を誘うように見える。中納言の歌。

くる、間を…（日が暮れたらまた逢えると約束しても、やはり朝露が置

く頃に起きて別れるのはつらいことですよ。)

鳴き乱れる虫の声々が、玉の台うたまよりもこよなくまさっているのだつた。女は、

わびしとも：(私にはつらいとも思えませぬわ。毎夜毎夜置き添える袖の露あせに慣れていまして。)

と、遠慮がちに言う、そのさまも親しみ深く優美で、こうして近くでご覧になるのは、まことに可憐である。

「白露に風の吹敷く秋のはつらぬきとめぬ玉ぞちりける」〔後撰集・巻六・三〇八・朝康〕を引く。「なにせんにたまのうてなも八重むぐらいつらんなかにふたりこそねめ」〔古今六帖・第六・むぐら・三八七四〕を引く。

〔16〕中納言、帰宅して感慨にふける

とのおはしましてもねられ給はず、「をかしかりける人さまかな。何ばかりの人にかあらむ。とし比の行かへりにめなれたりし家なれど、かくをかしくらうたきもの、物すべきと思ひし。一よの旅寝もむつかしかりぬべきのちかさはうとましよう、しげきむぐらはあつかはしよう、さすがに又あはれにこそ見入られしか。さは、かゝるおもひのくさもおふる物かな。さばかりすき事このむものども今までしらざりけんよ。われにてさへ長きほだしとおほゆるぞ、はらぎたなき心にはありける。なれゆくよ、にしげからんこひ草は、そむく山路にはつきなかるべし。また、世の中をのがる、すくせなくてらしいの人にてあらんにつけても、此かたにうつし心なう心いら

れしてか、づらひありく、人のうへさへもどかしう見ぐるしき業なからまし」とのどかにおほしやすらふは、猶こよなき御まめ心なれど、よの中にはあだにいふを、みづからも聞給ひては、「いかなれば」とほゝゑまれ給ふべし。

〔通釈〕

中納言は、自宅に戻られてもお眠りになれず、「魅力的な人だったなあ。いったいどの程度の身分の人なのだろう。長年宮邸への行き帰りに見慣れていた家だが、こんなに魅力的で可憐な人が住んでいるよ」とは思わなかったよ。一夜の旅寝も嫌になりそうな軒の近さはうとましく、生い繁った葎むらはわずらわしく、それがまたさすがにしみじみと心惹かれて中を覗く気になったのだったよ。それが、こんな物思いの草も生えるものだなあ。それにしても、あれほど好きな事を好む連中が、今まで知らなかったらしいことよ。自分でさえ、あの女がこれから長い絆はだしになると思われるのは、意地汚い心というものだ。あの女に慣れ親しんでいくにつれて、恋草が繁ってくるだろうことは、世を背く山路には不似合いだろう。また、世の中を逃れて出家する宿世がなくて、普通の俗人として生きているにつけても、色事に正気もなく心がいらだちながらかかずらわって歩くのは、他人のことであってさえもどかしく見苦しい所業である。今のうちから足がとだえがちで慣れさせておけば、あちらも慣れて、訪れが待たれる宵もないだろう」と、気長にあれこれ思ってためらう

のは、やはり格別なまめ心なのだが、そんな中納言を世間では浮気者と噂するのを、ご自身も耳になさっては、「なにゆえにそんなことを」とつい微笑んでしまわれるに違いない。

【17】葎の宿の女君の素姓と叔母君の身の上

中つかさの宮へ参り給ふかへさのついでにはかならずとまり給へり。此やどのあるじは、こひごの守なりけるもの、めになんありける。女君は右大臣殿の御子にて、此北のかたのあねなりける人のはら也。ふたつばかりに成給へるほどに母君ははかなく成給ひてしかば、をばぎみあはれに心ぐるしき事に思ひて、こまかにはぐ、みおふしたて給ふ。「いはけなきほどはいかにもうしろめたければ、せばき袖につゝみても身をはなたず見奉りてん。おとなしく成給はゞ、あやしき身にひきそへては人としきよをもえ見給ふまじければ、いかなるたよりをもとめても殿のわたりにはのめかしなむ。あはれとおぼしたりしかば、ことの外には思ひ給はじ。かつはこゝろのやみにまどはぬおやはあるまじげなれば、かならずかまへられ給はん」と思ひつゝ、あかしくらすに、十二三になり給ふまゝにめでたくをかしき御さまなれば、いとゞらうたゞうれしくて、「此春のほどにも聞えむ」など、かみともいひあはせて、うち／＼にその心まうけどもし給ふに、かみ俄に心ちわづらひてうせにしかば、はかなくかなしき事をおもひなげきつゝ、しのぶぐさつむべきわすれがたみもなければ、しる處などもよそのものになりて心ぼそかりけれ

ば、「此きみをさへはなちては、うらめしきよの中をかた時ふべき心ちもせず。かつはこの人をおもはむ人をよすがにて、ながらへむかぎりのよにはあらん。かたちのめで度おはすれば、ふるにひき出給ふ幸も、などかなくてはあらん」とねむじ過して、こゝらの年月もかさなりけるに、かくおもはずにうつくしき御すくせのいでまうできしかば、いと／＼うれしう、歎わたりけるとし比のしるし見えて、いとこゝろゆきぬ。

〔通釈〕

その日以来、中納言は、中務の宮へ参上なさる帰り道のついでには、必ず葎の宿に立ち寄って留まりなされた。この家の主人は、亡き肥後守だった者の妻なのであった。女君は右大臣殿の御子で、この北の方の姉である人の腹に生まれたのである。二歳ほどになられた頃に、母君はお亡くなりになってしまったので、叔母君が女君をかわいそうで気の毒に思つて、心をこめて庇護し養育なされた。「幼い間は、いかにも気がかりなので、卑しい私の袖に包んででも、我が身のそばから離さずにお世話申し上げよう。大人になられたら、卑しい我が身のそばに置いては、一人前の結婚もおできになれまいから、どんなつてを求めてでも、右大臣殿の周囲に姫の存在をほめかそう。殿は、亡き母君をいつくしんでいらしたから、心外だとはお思いになるまい。それに、心の闇に惑われない親はありそうもないから、必ず姫は認知していただけるだろう」と思いつつ日々を暮らしていた。女君が十二、三歳におなりになるにつれて、すばらし

く美しいご容貌なので、叔母君はますます可愛くうれしくて、「この春のうちにも右大臣殿に申し上げよう」などと、肥後守とも相談して、内々にその準備などを整えていらしたのだが、肥後守はにわかにな病気になるって亡くなってしまった。それで、叔母君は、世の中のはかなく悲しいことを思い歎きつつ、忍ぶ草を摘むべき忘れ形見(子)もないので、所有する土地なども人のものになって心細かったものだから、「この上、この君(女君)まで手放しては、恨めしい世の中をほんのしばらくも生きてゆけそうな気がしない。一方では、この姫君を愛してくれる人を頼りにして、寿命が尽きるまでの人生を生きたい。姫君は器量がすぐれていらつしやるから、思いがけず幸いを引き出しなさることもなくはないはずだ」と思って堪え過ごして、多くの年月が重なっていたのだったが、こうして思いもかけず、中納言とのうるわしいご縁が出現したのだから、とてもとてもうれしく、歎き続けてきた長年の苦勞の甲斐が見えて、非常に気が晴れ晴れとしたのであった。

「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな(後撰集・卷十五・二〇二・兼輔)による表現。「結びおきしかたみのこになかりせば何に忍の草をつままし」(後撰集・卷十六・雑二・一一八七・兼忠母の乳母)または「忍ぶ草見るに心は慰まで忘れ形見に漏る涙かな」(狭衣物語・卷三・一〇三・狭衣)を引く。

【18】初冬、中納言むぐらの宿を訪れる

れの宮よりの帰さにしのびまぎれて入給ふ。冬たつま、に、日にいく度か晴くもり、しぐる、こがらしにうち散たるならの葉は、やり水もみえずづみて、にはのしとねといはまほしく、山里の心地してをかしきを、そよめきわたり入給ふに、今もさと吹出る風にはら／＼とちりて、御かうぶり、なほしのそでにとまる紅葉のをかしきを、「かれ見給へ。二月の雪こそ衣にはおつなれ。さまかへたるわざなりや」とはらひ給ふ、紫のこきなほしにはえたまへるてつき、かほのにほひのあいげうは、女もをかしと見給ふらむかし。

〔通釈〕

いつものごとく、中納言は中務の宮邸からの帰路にこっそり紛れて律の宿にお入りになる。冬が立つにつれて日に幾度か晴れたり曇ったりを繰り返し、時雨模様の木枯らしに散らされた櫛の葉は、遣水も見えないほどに埋めて、「庭の茵」とでも言いたいくらいで、まるで山里のような気分がして興味深いところに、衣をそよめかせ中納言がお入りになると、今もさあつと吹き出す風にはらはらと散って、御冠や直衣の袖にとどまる紅葉が美しいのを、「あれをご覧なさい。二月の雪こそ衣には落ちると言うが、初冬の紅葉も衣に落ちるとは、いっぶう変わったしわざじゃないか」と言ってお払いになる、その紫色の濃い直衣に映えていらつしやる手の様子、顔のつやつやとした美しさは、女も素敵だと思って見ていらつしやることであるうよ。

*「松根に倚つて腰を摩れば 千年の翠手に満てり 梅花を折つて頭に挿めば 二月の雪衣に落つ」（和漢朗詠集・卷上・三〇・尊敬）を引く。

〔19〕中納言と女君、親密に語り合つ

例のこまかにうち語らひ、ながきよをさへかけてたのめ給ふ事おほかるべし。「いかで、名のりしたまへ。かばかりに成ぬれば、いかなりともおろかにおもふべき中のぎりかは」と、ゆかしがり給ふに、しのびすぐすべきにはあらねど、いひ出む事のつ、まじうはづかしければ、「きのまる殿に侍らばこそ」といふも、はかなだちてをかし。

おぼつかな誰がうゑ初てむらさきの心をくたくつまとなりけんなほ聞えたまへ。かうへだて給ふは、行末なが、るまじき心とうたがひ給ふや。君によりてを、とほきこひぢのくるしさをもならひたれば、ましていつしるべきあだし心ぞ」とのたまへど、

冬枯のみぎはにのこるむらさきはあるにもあらぬねざしなりけり

とほのかにいふ。「あやし。此むらさきこそむさし野のにもおとるまじうなつかしけれ」とたはぶれ給ふも、いとをかし。

あかつき露にそほちつ、ありき給ふもくるしければ、あさゆふながむる所へみてゆかましと、たへがたくおほしなるは、はじめの御心にはたがひにたるあやにくさなりや。されど、の給ひおきし御あたりをさへいとほしくき、過す、心にまかせたるわたくしの物あつ

かひをして、ねぢけたる事にかたぐにきかれ奉らんもはしたなかるべし。うへばかりこそかなしきものにせさせ給ふあまりに、かゝることもいとほしくけしからずともきかせ給ふまじけれ、かのおとゝのわたりにいひさわがむことのはさへ思ひつゞけられ給へば、はづかしくて有まじくおぼす。

〔通釈〕

中納言はいつものごとく、女君と親密に語らい、長い人生まで念頭にお約束なさることが多かったようだ。「なんとか、名のりをしてください。これほど親しくなったのですから、あなたがどのような素姓の人であっても、決しておろそかに思うようなあなたとの仲の契りではありませんよ」と女君の素姓を知りたがりなさるのだが、女君は、隠し通すべきことではないけれども、言い出すことが遠慮されて恥ずかしいので、「木の丸殿でございましたら名のりもしましようが」と言うのも、何だか頼りなげで面白い。中納言は、

おぼつかな…（気になりますよ。いったい誰が植え初めて、この紫草が私の心を砕きつかけとなったのでしょうか。）

やっぱり申してください。このように私を隔てなさるのは、将来長く続くはずのない心だとお疑いなのですか。あなた*のせいで私は、縁遠い恋路の苦しさを習ったのですから、まして、いつ浮気心を知ることなどできません」とおっしゃるけれど、女君は、

冬枯の…（冬枯れの水際に残っている紫草は、あるとも言えないような頼りない根ざしなのです。私の素姓も口にするほどのこともない卑しいも

のですわ。)

とほのかに言う。「不思議だ。***この紫草こそは、武蔵野のそれに劣らないほど親しみ深く感じるよ」と中納言が戯れなさるのも面白い。暁の露に濡れながらお歩きになるのも苦しいので、中納言は、「朝夕に顔を見られる所につれて行こうか」と、女君との交際を途絶えがたく思うようになったのは、はじめのお心とは違ってしまった、あいにくなお心である。しかしながら、亡き父左大臣が言い置かれた右大臣の姫君のあたりのことすら、縁談を進めずお気の毒なことと聞き過ごしているのに、その上、心に任せた私的な女遊びをして、ひねくれた振舞だとあちこちに聞かれ申すのもきまりが悪かろう。母上だけは、私をいとおしい者と扱って下さるあまりに、このような女出入りも、右大臣家に申し訳なくともないともお聞きにならないだろうけれども、右大臣の周辺で非難し騒ぐであろう言葉まで想像されるので、恥ずかしくて、女君を隠し据えることはあつてはならないこととお思いになる。

「あさくらやきのまろどのに我がをれば名のりをしつづ行くは誰が子ぞ」(新古今集・卷十七・雑中・一六八九・天智天皇)を引く。「君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらむ」(伊勢物語・第三八段)を引く。***「紫のひとつとゆゑにむさしのの草はみながらあはれとぞ見る」(古今集・卷十七・雑上・八六七・よみ人しらす)による表現。

【20】中納言、母上付きの女房たちと冗談を言い合つ

うへの御もとにわたり給へば、長ずびつにすみおこしてあつまりある人との有さま、いづれとなくめやすく、も・からぎぬのいろくやすらかにきなして、さぶらひなれたるけはひを、かしと見給ひて、「いで、何事をきこゆるぞ。そときかせよ。なきほどは、たれもく心ちよげにてをかききうた物語もすると見ゆれど、まろだにくれば、いみじきむしなどはひくるやうに、『それく』といひていざりのき、おとなしのさとつくり出るや。さるは、つひにながれ出るなみだもあらんを」と、ほゝゑみて聞え給ふに、わかき人とはしにかへりわびあへり。おとなびたるは中ともていで、「さにはべり。もりの下草さへ、駒だにすさまばと思ふ給ふれば、ましてわかき人は川とながれずといふ事なくや侍らむ。たゞそのみなかみは御まへぞしらせ給ふべき」といらへきこゆるに、えたへですべりかくる、も有。あるはつきしろひ、うつぶしなどすべし。「あやしきわざ哉。此ひじりをさの給はんは、みつせ河のしるべにやあらん。ほとけのかほより外にみるべきものもおほえぬしれぐしさを」とて立給ふ。かのむぐらのやどのひじきもは、しのびたまへどほのくみなき、てければ、「いで、それは佛にやおはす」といへば、そばなる人、「如いりんくわんせおんにてこそいませ。さばかりの御身にてそらごとは何せさせ給はん」などさゝめきてしのびわらふ。

〔通釈〕

中納言が母上の御もとにお渡りになると、長炭櫃に炭をおこして

集まっている女房たちのありさまが、いづれとなく見ばえがよく、裳・唐衣のさまざまな色彩を無難に着こなして、お仕えし慣れている気配を、興味があるとご覧になって、「さて、何ごとを申ししているのかな。そつと聞かせておくれ。私がいないうちは、誰も誰も気分よさそうで、風流な歌物語もしているように見えたが、そこに私
 が来させると、気味の悪い虫などが這つて来るみたいに『それ、それ』と言つていざり退き、音無の里を作り出してだんまりを決めこむのだ。それでは、しまいには流れ出る涙もありましようよ」と、ほほえみながら申し上げなされると、若い女房たちは死にそうにつらがり合っている。大人びた女房は、かえつてしゃしゃり出て、「そ
 うですわ。私のような森の下草ですら、『せめて駒だけでも相手にしてくれたら』と存じますのですから、まして若い人は涙が川となつて流れないということはないはずがありません。ただし、その川の
 水上はあなたがご存知のほですわ」とお答えするのに、堪えられなくてすべるように隠れる若女房もいる。ある者はつき合い、恥
 ずかしくてうつぶしなどするようだ。「奇妙なことだな。この聖を
 そのようにおっしゃるのは、三途の川を背負つて案内せよとのこと
 だらうか。私は仏の顔以外には見るべきものも思いつかない愚かさ
 だというのに」と言つてそこをお立ちになる。かのむぐらの宿のひ
 じきもならぬ恋人のことは、中納言は隠しておられるが、女房たち
 はほのぼのとみな噂に聞いているので、「さて、その方は仏様でい
 らっしゃいますか」と言うと、そばにいた人が「如意輪観世音でい

らっしゃいますよ。中納言様ほどのご身分の方が嘘などどうしてつ
 かれましよう」などとささやいて、忍び笑いをする。

「恋ひわびぬねをだになかむ声たてていづこなるらんおとなしのさと」（拾遺集・卷十二・七四九・よみ人しらず）を引く。「おとなしのかはとぞつひに流れけるいはで物思ふ人の涙は」（拾遺集・卷十二・恋二・七五〇）を引く。***「おほあらしの草おいぬれば駒もすさめずかる人もな
 し」（古今集・卷十七・雑上・八九二）を引く。***「なみだがはそのみなかみをたづぬればよをうきめよりいづるなりけり」（後拾遺集・卷十・雑下・三六八・賢智法師）または「色ふかき涙の川の水上は人をわすれぬ心なりけり」（続後拾遺集・卷十二・恋二・西行法師）を引く。***「思ひ
 あらば葎の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつつも」（伊勢物語・第三段）による表現。

（以下、続稿）

〔付記〕底本として御所蔵本の使用をご許可下さった原豊二氏に、記して御礼申し上げます。

A Complete Translation of *Yaemugura-Monogatari* (Part I)

Yoshinobu SENO

It is generally said that *Yaemugura-Monogatari*, one of the tales in Middle Dynasty of Japan, is a short one but its story is very coherent, and it is considered to be a good piece of work both in plot and style. However, no complete modern translations of the tale have been published.

This paper attempts to modernize the tale, based on the recently found manuscript which is in the possession of Toyoji Hara. Due to space limitation, only the first quarter of the whole tale is dealt with in the present paper.